

第九回 研究集会

研究集会印象記

山崎義光

二〇〇八年八月三〇日(土)
午後一時三〇分～六時三〇分

立命館大学・衣笠キャンパス・創思館
共催 立命館大学国際言語文化研究所

特集：東アジアネットワークのなかの横光利一

◇研究発表

・劉 妍 劉呐鷗と横光利一とのあいだ

―「中国新感覚派」の可能性

・謝惠貞 横光利一とその直弟子・巫永福

―明治大学文芸科時代を手かがりに

・李錦宰 李箱と横光利一の異国体験―

一九三六年を中心に

◇コロキアム：

―鄔其山・Lycium・上海ゲットー

ゲストスピーカー 大橋毅彦(関西学院大学)

ディスカッサント 金 泰暎(高麗大学)

崔 真碩(東京大学大学院)

コーディネーター 中川成美(立命館大学)

「東アジアネットワークのなかの横光利一」と題された今回の研究集会の前半、研究発表は、日本語を母語としない三名の研究者による意欲的な発表であった。

劉妍氏の発表は、「時代の色と空気を映し出し」た日本の短篇小説を集めたとの「訳者題記」をもつ劉呐鷗の翻訳小説集『色情文化』(一九二八)に、「モダン・ライフ」を表象する技法への関心がうかがえ、作品集『都市風景線』(一九三〇)所載の作品には横光作品と近似した「機械化された都市の表象」がみとめられると指摘。しかし、上海を表象する横光と劉呐鷗の作品を対照すると、そこには差異があることに着目する。横光が上海の暗黒面をえがき、都市の表象をナシヨナリズムや国家との関係に結びつけるのに対して、劉呐鷗は「都市に呑み込まれてしま」(『遊戯』)う個の感覚をこそ前景化し、近代・都市の躍動を表象していると論じた。

謝惠貞氏の発表は、まず、台湾出身の巫永

福が明治大学文芸科時代に受けた講義や蔵書などから、その文学的教養をさぐる。そして、最新の「日本文壇」の動向への意識が台湾文壇でもつ価値を戦略的に利用しつつ書かれた作品として巫永福「首と体」をあげ、横光「頭ならばに腹」と対照し、中国語と日本語との異種混濁性を余儀なくされた日本植民地地下における台湾新文学の土壌で活動した巫永福の屈折した「文学」の様相を論じた。

李錦宰氏の発表は、都市から都市へ国境線を越えるなかで、躍動し迷走する近代化の運動を感受した李箱と横光の異国体験を対照した。李箱の前衛的詩篇などからは東京に対する期待と幻滅をふくんだ表象が、また横光の「欧州紀行」や「旅愁」からは時間の経過と場所の移動のうちにパリへの印象が変化することが読みとれると指摘。憧憬と幻滅、共振と異和のなかで、ねじれ屈折した、それぞれの自己意識の運動の内実をさぐり、両者の対称性にせまろうとした。

いずれも論としてのまとまりという点で今後さらに論点を整理し精度を高める必要を感じたというのも率直な感想だが、しかし、それを難点と思う以上に、上海・台湾・京城を主たる場としながら文学活動をおこなつ

た三人の作家がとりあげられ、横光および一九二〇〜三〇年代の日本文学との関係・影響について論じつつも、それぞれの作家たち固有の「文学」の質と意義が問われたことに興味を刺戟される発表だった。言い換えると、「日本文学」「横光利一の文学」というこちら側から、向こう側の国際都市上海、植民地下

台湾、朝鮮における「文学」が眺められるという視角ではなく、逆に、向こう側の視角からこちら側との関係が論じられ、そして、向こう側で展開する文学活動の躍動的な展開に軸をおいて「文学」の質と意義が論じられた。後半のコロキアム、大橋毅彦氏による上海で交錯する文化的ネットワークについての発表とデイスカッサントを交えた討議にいたり、そうした視角はいよいよ鮮明となるにしたがって、「横光利一」は、東アジアネットワークを伝って流通しながらも、それぞれの地点を交錯点として展開された文学活動の one of them として、向こう側から距離をおいて眺められる機会となった。

第九回研究会印象記

高橋幸平

今研究会では「東アジアネットワークのなかの横光利一」という特集のもと、三本の研究発表とコロキアムがプログラムされた。研究発表は中国・台湾・韓国を出身地とする三名によるもので、それぞれ東アジア諸地域において活動した作家達と横光利一との関連を論じたものであった。

劉妍氏「劉呐鷗と横光利一のあいだ―中国新感覚派の可能性―」は、台湾出身のモダニズム作家であり日本の新感覚派にも共鳴した劉呐鷗の『都市風景線』と横光の複数作品とを比較し、両者の類似点と劉呐鷗の独自性を論じたものであった。劉氏は機械化された都市の表象のされ方という点で『都市風景線』に「頭ならびに腹」や「七階の運動」との類似性を認めるが、上海に対する登場人物の認識については両者の作品に相違があると主張した。新感覚派への共感を起点にした劉呐鷗の文学ではあったが、それが日本近代文学からの一方向的な影響という文脈のみでは理解

しきれないことが強調された。

会場からは、横光・劉に共通する視覚芸術への参画について問う声や、本発表が従来の文体比較論に終始することなく、東アジアのモダニズムという大きな枠組みの中に二人の文学者を位置づけた点を評価する声などが挙がった。東アジアの作家における日本近代文学の影響とそこに回収されない独自性、という枠組みは聞き慣れたもので理解しやすいが、今回提示された部分的な比較だけで、上海の位相についての両者の相違が有意なものであると判断できるかどうかには疑問が残る。興味深い論旨であっただけに、論証の足場となる資料をもっと豊富に紹介して欲しいと感じた。

謝恵貞氏「横光利一とその直弟子巫永福―明治大学文芸科時代を手がかりに―」は、台湾の作家巫永福について、彼が自作に横光文学を受容し変容させた背景を明らかにしようとしたものであった。まず謝氏は巫の蔵書と明大文芸科での人間関係との調査から、巫が横光を含む明大教師陣を通じて西洋文学への関心を深めていったとする。続いて、巫「首と体」が「頭ならびに腹」の題名と文体とを模したことの背景として、日本語創作の困難

アナウンス

第八回大会

とき 二〇〇九年三月一五日(日)

ところ 愛知淑徳大学星が丘キャンパス

※今回は日本近代文学会東海支部との合同開催が決定しています。

■研究発表

・教誓悠人さん(広島大学院生)

■シンポジウム

—「モダニズムの土壌を問いなおす」(仮)—

・竹内瑞穂さん(名古屋大学院生)

・中村三春さん(北海道大学)

・二瓶浩明さん(愛知県立芸術大学)

・馬場伸彦さん(甲南女子大学)

■シンポジウムの趣旨としては、①「東海」というトポスを意識しつつ、②モダニズムを培養した歴史的諸条件を視野に入れて、③詩と散文の相互関係から、④モダニズム文学を多角的に検証します。⑤もちろん、そこに横光利一の文学が交差することを期待しています。

■詳しい内容につきましては、後日、ご案内さしあげます。会員のみなさんの積極的なご参加をお待ちしています。

横光利一文学会会報 第14号

二〇〇八年十二月六日発行

◆横光利一文学会事務局

〒612-1857

京都市伏見区深草塚本町六七

龍谷大学経済学部 田口律男研究室内

☎ 075-645-8436

公式URL <http://yokomitsu.jp.n.org/>

◆編集人 田口律男 杉谷英紀